

小大連携に基づく教員養成フィールドワーク授業の開発

島津 俊之（和歌山大学教育学部）

三品 英憲（和歌山大学教育学部）

山本 彩朱（和歌山市立藤戸台小学校）

I 研究の背景と目的

本稿は、和歌山大学クロスカル教育機構教育・地域支援部門地域教育支援室の平成 30 年度「実践的地域連携教育推進事業（附属・公立）」に採択された標題の実践研究課題の報告である。平成 20 年告示の現行学習指導要領は、小学校社会科の各学年の目標に、「社会的事象」を「調査」して「調べたことや考えたことを表現する力を育てる」ことを含めている。また指導計画の作成にあたっては、「観察や調査・見学などの体験的な活動やそれに基づく表現活動の一層の充実」を図り、「身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を取り入れる」こととしている（文部科学省 2008）。そして平成 29 年告示の新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の導入に関連して、小学校社会科の目標の冒頭に、「地域や我が国の国土の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解するとともに、様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能を身に付ける」ことが掲げられる事態となっている（文部科学省 2018）。かかる事態を踏まえるならば、児童にフィールドワークの「技能」を身に付けさせるために、そもそも小学校教員はいかなる資質を備えるべきなのかが今後ますます問われてゆくことが予想される。しかしながら、現実にはフィールドワークを苦手とする小学校教員が多いことも、つとに指摘されるところである（池 2012）。

こうした背景の下で、研究代表者の島津と共同研究者の三品は、平成 28 年度から和歌山大学教育学部で「小学校社会科基礎論」（2 単位、前期水曜 1 限）の授業を担当してきた。当該科目は、平成 28 年度に発足した初等教育コース初等教育エキスパートプログラムの専門科目（専攻専門）の一つであり、この科目区分は 16 単位の取得が義務付けられている。そのうち 14 単位分は、多くの分野にまたがる「初等教育エキスパート科目」（18 科目＝36 単位分）から選択履修することになっており、「小学校社会科基礎論」もこの科目群に含まれる。履修年次は 2～3 年次で、履修者数は平成 29 年度が 1 名（2 年生）、平成 30 年度が 2 名（いずれも 3 年生）であった。なお、平成 30 年度入学生より、初等教育エキスパート科目のうち、この「小学校社会科基礎論」と「初等教育研究論」の 2 科目 4 単位分が必修科目となった。そのため、平成 31 年度以降は履修者数が増加する見込みである。

平成 29 年度は、新学習指導要領の第 3 学年社会科の内容に「消費者の願い、販売の仕方、他地域や外国との関わりなどに着目して、販売に携わっている人々の仕事の様子を捉え」ることが含まれる点に着目し、南海電鉄和歌山大学前駅周辺の小売商業施設を対象としたフィールドワークの実施、学習指導案の作成と検討、模擬授業の実施という流れで授業を行った。この段階でのフィールドワークは、現場で児童とともに行う《本番》のフィールドワークではなく、授業づくりの一環としての教材研究の段階で専ら教員が行う予備的なフィールドワークを想定したものであった。この年度の授業は、フィールドワークに馴染みのない初等教育エキスパートプログラムの学生にとって一定の意義があったと考えられるが、担当者はいずれも初等教育の現場経験がなく、かかる大学教員が初等教育教員養成に特化した授業を行う上で、初等教育の現場との連携に関して課題が残されていると感じられた。

この課題を克服するためには、大学教員と学生が共に小学校の授業現場に立ち会うことにより、初等教育教員養成に特化した大学授業の質を高めてゆくことが必要と考えられた。幸いにも、和歌山大学に隣接する和歌山市立藤戸台小学校は、和歌山大学教育学部と和歌山市教育委員会との連携協力の下で、和歌山大学教育学部の連携校として位置付けられてきた。こうした小大連携の枠組みは、社会科・理科・総合的な学習の時間におけるフィールドワークに関連した、小学校授業と大学授業の協同のためのプラットフォームとしても機能することが報告されている（田部・加藤 2013）。本研究においても、前述の小大連携の枠組みに支えられる形で、小学校における授業者＝共同研究者として藤戸台小学校から山本の参加が実現することになった。

本研究の目的は、次の二点である。一つは、大学教員と学生が小学校社会科の授業現場（野外授業＝フィールドワークと室内授業＝インドアワーク）に立ち会うことを通じて、小学校社会科基礎論の授業内容の実践的な改善を図り、授業現場でのフィールドワークを組み込んだ新たな大学授業の開発につなげることで、もう一つは、大学教員と学生が授業現場に立ち会うことで、小学校社会科の授業それ自体にいかなる効果がみられたのかを探ることである。

II 研究の経過

本研究は、前述の如く島津と三品が担当する小学校社会科基礎論の授業と表裏一体となって展開する側面を有した

が、同時に、藤戸台小学校において山本が担当する社会科の授業とも不可分な形で進められるべきものでもあった。というのは、小学校における山本の授業それ自体が、いわば小学校社会科基礎論の授業の一部として組み込まれていたからであり、この意味で小学校における授業者＝共同研究者としての山本は、同時に小学校社会科基礎論のゲスト担当者としての役割を事実上担っていたといえる。山本は本年度5年4組(男子14名・女子16名)の担任となり、1学期の社会科では現行学習指導要領の第5学年における「我が国の農業や水産業」に関連して、当該指導要領の文言を借りれば、「食料生産に従事している人々の工夫や努力」などを「農業や水産業の盛んな地域の具体的事例を通して調べる」指導計画を立てていた。このうち、農業に関する指導計画は、採択教科書(池野ほか2018)に記載された山形県庄内平野の稲作の事例と、アイガモ農法による無農薬の稲作を実践している藤戸台小学校近隣(和歌山市梅原)の農家(貴志正幸氏)の事例を、農家へのフィールドワークを通じて比較し、稲作の重要性や課題について理解するとともに、農家の工夫や思いについて考えるというものであった。従って小学校社会科基礎論の授業も、この5年4組の社会科の指導計画に沿う形で微調整を繰り返しつつ進められた。初回の4月11日(水)の授業では、小学校社会科基礎論の全体的な授業計画とねらいについて学生に説明した。次いで4月18日(水)と25日(水)の授業では、学習指導要領の新旧比較を通じて、小学校社会科においてはフィールドワークが重要な位置を占めていること、新学習指導要領ではフィールドワークを含めた広義の《地域調査の技能》の習得が以前にもまして重視されていることを説明した。そして、前述の教科書を用いて機械化が進んだ庄内平野の大規模稲作経営について理解を深め、5年4組の授業現場に立ち会うための予備学習とした。

農家へのフィールドワークは、小学校側や農家側のスケジュールの都合から、結果的に小学校社会科基礎論の正規の授業日とは異なる日程(5月14日(月)と6月4日(月))で行うことになった。両日とも、小学校の午前の授業時間の大半がフィールドワークに割かれ、学生は履修の都合上、やむをえず部分的な参加となるケースも生じた。また両日とも、フィールドワークは第5学年の他の学級と合同で行われ、児童は小学校が位置する新興住宅地「ふじと台」から貴志氏宅まで、往路約1.5km・復路約2.5kmの道のりを徒歩で往復した。5月14日(月)のフィールドワークでは、児童は貴志氏から農家の仕事やアイガモ農法の実際について説明を受けた後(写真1参照)、自らの知識や理解を広げ深めるために、様々な質問を貴志氏に対して行った。その後児童は、アイガモが放たれる予定の貴志氏の水田を見学して帰校した。5月16日(水)の授業では、2日前の生々しいフィールドワークの体験について、島津・三品と学生2名の間で振り返りを行った。さらに5月21日(月)には、藤戸台小学校において島津・山本と学生1名との間で振り返りが行われ、山本からは、児童からの質問の引き出し方に課題が残されたことや、《突っ込んだ質問ができる段階にまで子どもたちを引き上げることができていなかった》という反省が示された。こうした反省が、結果的に6月4日(月)の二度目のフィールドワークにつながってゆくが、5月23日(水)には当初より予定していた山本の5年4組における社会科授業の見学のために島津・三品・学生2名が藤戸台小学校を訪れた。この日の授業は、児童が教科書で学んだ庄内平野の米作りと、フィールドワークで実際に見聞きした貴志氏の米作りの違う点を出しあうことで、貴志氏の工夫や思いについての問いを深めるというものであり(写真2参照)、山本はこの日のために学習指導案を学生に向けて事前に用意した。当日の授業の振り返りは、5月29日(火)に藤戸台小学校で島津・山本・学生1名が参加して行われた。そこでは、児童の気付きや問いは比較という作業によって一定の深まりをみせたが、《もっと知りたいという気持ちをもう少し出させたかった》という山本の思いが語られた。翌30日(水)の島津・三品・学生1名による大学での振り返りを経て、6月4日(月)のフィールドワークの当日を迎えた。今回は貴志氏への児童の質問が中心となり、アイガモ農法の具体的なやり方や、無農薬農業に取り組む貴志氏の思いといった点に質問が集中したが、貴志氏が生きたアイガモを抱いて児童に説明するという一幕もあった。この二度目のフィールドワークでは、一度目のフィールドワークを経験した学生が、教員・児童・農家の三者間のインタラクティブ・コミュニケーションによって成り立つフィールドワークの授業現場をどのようにとらえ直すかが、一つの焦点となりえた。その振り返りは、6月6日(水)に大学で島津・三品・学生2名が参加して行われ、農家に対する児童の質問を教員がどのようにサポートしているかに関して、学生の認識がそれぞれに語られた。また、6月19日(火)には藤戸台小学校で島津・三品・山本の間で同様の振り返りがなされ、複数の学級が同じフィールドワークに参加する場合でも、学習指導要領に示された目標に到達するための道筋が学級によって異なることなどが話し合われた。

その後、小学校社会科基礎論の授業は再び大学という通常の空間に戻ることになり、6月20日(水)とそれ以降の授業では、学生に対して、藤戸台小学校の授業現場(フィールドワークとインドアワーク)に立ち会った結果学べたことや感じられた課題についてミニレポートを課した。そして、このミニレポートに基づくディスカッションを踏まえ、学生に対して、第5学年1学期で扱う稲作について自らの学習指導案を作成して7月25日(水)に模擬授業を行わせることとした。島津・三品による《指導案指導》(学習指導案の作成方法や内容に関する指導)を経て、学生のひとは、庄内平野と貴志氏の米作りの違いについて考えさせる前提として、児童が教科書から庄内平野の米作りの特徴をグループワークでまとめて発表するという指導案を作成して模擬授業を行った。もうひとりの学生は、指導案の作成にあたって、貴志氏のアイガモ農法がわかやま市民生協のウェブサイトですでに紹介されていることに着目した(<http://www.wakayama.coop/wnews/vew.php?no=20170706110046>)。そして、ウェブサイトの写真や和歌山県

の雨温図や農業統計などを用意して児童の予想や疑問を引き出し、フィールドワークで何を調べたいかを考えさせるという指導案を作成して模擬授業を行った(写真3参照)。この模擬授業には島津・三品の他に、社会科教育領域に属する学部生や大学院生が計5名参加し、授業後の振り返りのディスカッションに加わった。その後、小学校社会科基礎論の授業全体から学べたことや課題と感じられたことに関して学生にレポートを課し、その提出と内容評価により、本年度の小学校社会科基礎論の授業は終了となった。8月28日(火)には藤戸台小学校で島津・三品・山本がミーティングを行い、研究結果の取りまとめなどについて話し合い、それ以降は電話や電子メールなどで情報交換を行った。本稿は研究代表者の島津が中心となって取りまとめ、共同研究者の三品・山本の内容確認を経たものである。

Ⅲ 学生と小学校授業者の見解

本章では、1章で述べた研究目的の達成の度合いを判断する材料として、学生と小学校授業者の見解を示すことにする。まず、学生2名のレポートを以下に掲げる。

【学生レポート①】

小学校社会科基礎論の講義・参観・模擬授業を通して、農家見学の準備からまとめまで実際に視て多くのことを学び、考えさせられた。まず講義は指導要領について現行と改訂の違いを、話し合いを中心に比べていった。なかなか指導要領を読む機会がないのでどのように改訂され、主にどのような資質・能力が求められているのか熟考することができてよかった。参観は藤戸台小学校の山本学級で、5年4組の子どもたちの学びについて見学することができた。2回貴志さんの農家を訪れ、1回農家見学をした後の教室での発表を見学するという、計3回の参観をすることができた。1つの単元を3時間分参観でき、その時間での反省をふまえどんなふうに児童を誘導し展開していくのか知ることができた。見学の際、ただ貴志さんに米作りについて聞きに行くだけではなく、集合場所から貴志さんのところに行くまでの安全の配慮や歩くスピード、貴志さんの農家に着いても熱中症や気分の悪い児童がいないか注意しておく必要があると感じた。そして見学が終わるたびに山本先生とどんな点が良かった、ここは改善点という話をするのができてよかった。模擬授業の実践は、「米作り」の見学前の準備として「庄内平野」の資料(教科書)を用いたグループワークを構成した。思った通りに書けなかった板書計画や教材の活用は、もう少し改善する必要があると感じた。また自由にまとめてもらうためにワークシートを白紙にしたが、「生産工程」「環境」「生産量」の3つのキーワードの出すタイミングも吟味する必要があると感じた。自由に書いてもらいたいが、この3つのキーワードを出すタイミングが早く、それらについてしかまとめられておらず、その他の意見が聞かれることはなかった。白紙のワークシートについてはグループワークの時間を多く取っている単元計画になっているので、多くの紙を使い試行錯誤してまとめる力が付いているかそんな部分も評価対象にできたらと思う。模擬授業で児童役となってくださった先輩方のコメントをいただいたとき、模擬授業を行う前に自身のこの授業を行う意図や教材の説明があればと感じた。どういった展開をするのか知った上で、どのような改善策が出るのか、時間配分など、よりの確かなコメントになったのではと感じる。そして模擬授業が終わって、この単元計画を練った模擬授業は現場に通用するのか知りたくなった。5年生に授業をすることはあまりないからこそ、試してみたい気持ちが強くなった。今回、「米作り」を中心に深く考えることができた。農家見学の様子、授業への協議、模擬授業、ICTの活用も知ることができてよかった。各小学校で農家見学に差はあるが、藤戸台小学校という住宅密集地の中での農家見学はとても勉強になった。(川村奈都美)

【学生レポート②】

社会科の学習を行うにあたって学年が上がるにつれ、扱う範囲が自分たちにとって身近なところから日本全国や世界に目を向けるという様に広がっていく。それによって、児童達は教科書だけの学習だけではイメージが付きづらかったり、興味関心を向けることが難しかったりしてくると考えられる。そこで、フィールドワークの様に直接現場に足を運び、直接見て、話を聞くことでイメージがしやすく、興味・関心も高まりやすいと考える。実際、藤戸台小学校のフィールドワークの見学に行った際に、米作り過程に使用される機械や、貴志さんが行う米作りや貴志さん自身について、またアイガモ農法について話を聞き、畑や機械を自分達の手で見た児童たちの興味関心はかなり高くなった印象を受けた。それは、その後の振り返りの授業でも感じた。振り返りの授業では、貴志さんから聞いてきた話や自分達の発見を、今まで学んできた内容と結びつけながら板書されており、児童たちにとっても整理しやすく、また新たな疑問点が生まれるよう誘導するような工夫がされていた。これは児童たちにとって、学びが学びを生み、深い学びに繋がっていくと考えられる。学校がある地域に教材と関連する場所や人、事柄などはどんどん学習に利用していくと良いと感じた。このように、フィールドワークは非常に効果のある学習方法だと考えるが、今回のフィールドワークを通して課題もあると感じた。フィールドワークの場所と学校の往復が、児童の体力的にしんどい部分があったので、フィールドワークに行く回数数を考える必要があると考えた。今回見学したフィールドワークでは振り返りの授業で新たな疑問点を出し、その疑問を解消しにまたフィールドワークに行く、という形をとっていたが、この2

回のフィールドワークでの質問を1回にまとめることはできなかったのだろうか。2回目には質問をする以外にも、貴志さんが飼育しているアイガモを見ることができたというメリットはあった。しかし、フィールドワーク前の学習で、貴志さんのところに訪問する回数を減らすために、難しいことだと思うが、授業内で質問を練るための工夫があるのではないかと考える。自分なりにその工夫を考え模擬授業を試みたが、やはりなかなか難しい部分があった。模擬授業では、自分がやりたかったこと、伝えたかったことが、計画通りにし、十分に伝えることができなかったことが反省点である。まず、自分の知識不足などところがあり、様々な情報をどう繋げれば良いのか、またそれをどのように授業で展開すると伝わりやすいのかを、考えることが難しかった。また、講義形式になりやすいであろう社会の授業をいかに対話的にするか、興味を引くための工夫をどれだけ持っておけるかなどが課題であると考え。小学校社会科基礎論の授業を通して、自分の苦手な社会科の学習の指導方法について考えられたことは、非常に自分にとってプラスなことであった。(首藤瑠那)

次いで、小学校授業者＝共同研究者の山本の見解を示す。山本は、大学教員や学生が立ち会うことで授業現場や授業者に生じた効果について、次のようにまとめている。

【共同研究について】

本年度、和歌山大学との共同研究として社会科の学習に取り組んだ。単元は「わたしたちの食生活と食料生産」の中の米作りについて取り上げた。ここでは、今回私が大学と共同研究をおこなって感じたことや成果について述べていきたいと思う。本単元では、子供たちにより近く“米”“米農家”を感じてもらいたいという思いがあったため、地域の米農家さんに何度も見学に行く機会を設けた。その際、担任一人では、道中の危険を把握する目が少なく、安全を守る指導が大変である。しかし今回は、何度も見学に行ったにも関わらず、その都度大学の方から引率者を出してくださったため、余裕をもって子供たちの行動を把握し、安全面で安心して行くことができた。見学先でも、話に夢中になっている子供たちに、「車が来たよ。」などの声掛けをしてくださったおかげで安全面に十分に配慮した見学を行うことができた。大学の教授や学生の方々とお話しする機会があったことで新しい視点を得ることもできた。授業を考える際、教材研究をして子供たちの反応を把握しながら進めていくのだが、今回、何度か一緒にさせていただいたことで自分の中にはない見方や考え方を知ることができた。たとえば、見学の際の子供の反応に対しても、私自身は「こういったところに気付いてくれなかったなあ」と思っていたところでも、大学の先生には「こんなところに気付いている子供がいましたね。」とお話ししていただくことがあった。授業の流れを考えると、どうしても思い描く方にいかないもどかしさを感じ、子供たちの感じたままのを見逃してしまいがちになるが、今回、違った視点で子供たちを見てくださっていたおかげで、私自身が気付かなかった面に気付くことができた。また、教材についても知識豊富な大学の先生のおかげで「アイガモ農法」の知らなかった情報も得ることが多くあった。様々な視点で教材研究をすること、子供を見ることの必要性を改めて感じることもできた。授業後の協議会でも、同じことが言えるのではないかと考えている。本時において私自身、課題の残る点が多くあったなど感じていた。もちろんその点についても様々なご意見をいただき勉強になったのだが、大学の先生は良かった点をお話ししてくださったので、自分では気づいていなかったところや子供たちの頑張りに気づくことができた。また、今、まさに授業について勉強されている学生の方々が、「ここはどうしてこんな発問をしたのですか?」「この板書がよかったですと思いました。」など感じたことをそのまま伝えてくださったので、新鮮な考え方を得ることもとなり、自分自身が無意識に大切にしていたことや反対に流してしまっていたことなどにも気づく機会となった。今回の共同研究によって、教師は立ち止まって考える機会をたくさんいただいたと感じている。学ぶことや気づくことがあり、大変良い機会になったことを感謝している。

以上、本章では学生と小学校授業者の見解を紹介した。学生2名のレポートからは、授業現場でのフィールドワークを加えた小学校社会科基礎論の授業内容への肯定的な評価が読み取れるが、模擬授業後のディスカッションの運営方法における課題なども見えてきた。また山本の見解は、小大連携の枠組みに基づく大学教員と学生の立ち会いが、小学校の授業現場や授業者にプラスの効果をもたらすことに触れるものであった。こうした諸点を確認しつつ、本章では若干の考察と展望を行うこととしたい。

IV 若干の考察と展望

新学習指導要領の社会科では、児童・生徒が「社会的な見方・考え方」を、地理・歴史・公民の各分野にわたって、また、小学校・中学校・高等学校の各校種にわたって、横断的かつ相互関連的に「自在に働かせる」ことができるようになることが期待されている(永田 2017)。こうした《働かせる力》を身に付け(させ)るために、地理・歴史・公民に関わる事象が共在する《地域》に児童・生徒を引率して調査を行わせるフィールドワークは、効果的なツールとなりうる。なぜなら《地域》とは、児童・生徒がまさに直接体感できる、社会的な《ヒト・モノ・コト》に溢れた

存在であるからだ(島津・田城 2017)。児童・生徒の「社会的な見方・考え方」は、教員の適切な導きにより、こうした《ヒト・モノ・コト》とフィールドワークを通じて直に触れあうことで、インタラクティブに育まれてゆく。《地域》とは、まさにかかる《インタラクティブ・ラーニング》を可能にする場として在る。

こうしたことを念頭に置きつつ、本研究では小大連携の枠組みの下で、小学校社会科基礎論の授業に、小学校社会科の授業現場におけるフィールドワークを組み込むことを試みた。そもそも小学校社会科基礎論とは、教科教育法などと同じく、小学校社会科の授業の在り方それ自体を学び考える授業なのであり、つまりは《メタ授業》の一種に他ならない。町田(2008: 3)は、メタ授業のあるべき方向性やその教育的意義を、「その授業を受講した学生は、まさに身をもって授業のスキルを体得することができる」点に求めている。本研究におけるフィールドワーク授業の開発も、まさにこうしたことをめざしたのであり、前章のレポートにみられるように、学生は室内授業の参観や通常の教育実習のみでは経験できないような、フィールドワークを行う際の配慮やスキルを実地に学び考えることになった。また、野外授業(=フィールドワーク)を踏まえた室内授業(=インドアワーク)の在り方についても、学生は多くの示唆を得ることができたのではないかと。さらに欲をいえば、学生は見聞した現場の授業スキルをそのまま真似るのではなく、それらをリフレクティブに捉え直し、自らの将来の教育実践をかたちづくる基盤としてゆくことが求められよう。学生のレポートには、この点に関してもみるべきものがあった。

むしろ、小学校社会科基礎論の授業の核心部分を全て小学校側に《丸投げ》してしまうような、形だけの《小大連携》では大学側の見識が問われることになろう。この点に関していえば、新旧の学習指導要領の第5学年社会科における「地理的環境」とは、市町村や都道府県に留まらず日本全体に拡大してゆくべきものであり、地域学習と日本地理学習との連携により一層の注意が払われるべきであろう。とはいえ、そもそも本研究は小学校社会科の授業者たる山本の参加なくしては成り立ちえないものであったし、学校現場に通暁した大学授業のスキルを身に付けてゆくことこそが、専門分野の如何を問わず、教員養成学部で大学教員に課せられた使命であることは論を俟たない。

じつは、本研究でいう《フィールドワーク》には、二重の意味が込められていた。それは、次のようなことである。そもそも、学生が小学校の室内授業(=インドアワーク)の現場に立ち会うことそれ自体が、大学という授業空間を離れた《フィールドワーク》たらざるをえない。そして、その学生が小学校の野外授業(=フィールドワーク)の現場に立ち会うことは、いわば《フィールドワークに関するフィールドワーク》、まさに「メタフィールドワーク」(新屋 1984; Rival 2014)と称される振舞いの一種なのであった。従って、授業現場でのフィールドワークを組み込んだ大学授業の開発とは、前者のフィールドワークと後者のメタフィールドワークの双方を組み込み、かつ双方の《フィールドワーク》の有機的な統合を図る大学授業の開発に他ならない。学生のレポートからは、かかるメタフィールドワークとフィールドワークの経験を統合しようとする姿勢が読み取れた。今後もこうした授業開発の方向性を堅持しつつ、さらなる授業内容の改善を図ってゆきたいと考える。

[付記]

本研究の遂行にあたり、岡野恭子校長ほか藤戸台小学校の先生方には多大なご協力を賜り、お礼申し上げます。

[引用文献]

- 池 俊介 2012. 地理教育における地域調査の現状と課題. *Ejournal GEO*7(1): 35-42
- 池野範男ほか 34 名 2018. 『小学社会 5 年 上』日本文教出版.
- 島津俊之・田城賢司 2017. 「ヒト・モノ・コト」の視点からみた高校生の地域問題探究手法の開発. 和歌山大学クロスカル教育機構教育・地域支援部門・和歌山大学教育学部編『和歌山大学教育学部 附属校・公立学校との連携事業 平成 28 年度成果報告書』29-34. 和歌山大学教育学部.
- 新屋重彦 1984. フィールド・ワークにおける距離の問題—異文化理解の可能性をめぐるメタ・フィールド・ワークの位置. 四国学院大学論集 58: 58-70.
- 田部俊充・加藤美由紀 2013. 小大連携による環境教育研究の取り組み—生物多様性の理解. 日本女子大学紀要(人間社会学部) 24: 63-72.
- 永田忠道 2017. 『新学習指導要領改訂ポイント解説資料—地図帳とともに「社会的な見方・考え方」を. 自在に働かせる授業を目指して』帝国書院. https://www.teikokushoin.co.jp/teacher/pdf/2017_new_course_of_study_revision%20commentary.pdf (最終閲覧日: 2018 年 12 月 14 日)
- 町田守弘 2008. 「国語科教育法」をどのように扱うか—「メタ授業」としての要素を生かすために. 早稲田大学教育学部学術研究(国語・国文学編) 56: 1-14.
- 文部科学省 2008. 『小学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版社.
- 文部科学省 2018. 『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 社会編』日本文教出版.
- Rival, L. 2014. Encountering nature through fieldwork: Expert knowledge, modes of reasoning, and local creativity. *Journal of the Royal Anthropological Institute (N.S.)* 20: 218-236.



写真1 農家フィールドワークの光景（和歌山市梅原：2018年5月14日，島津撮影）



写真2 5年生社会科授業の光景（藤戸台小学校・5年4組教室：2018年5月23日，島津撮影）



写真3 模擬授業の光景（和歌山大学教育学部・中-405教室：2018年7月25日，島津撮影）